登米市中田町

浅水の文化財

浅水コミュニティ運営協議会
浅水文化財保存会

浅水長谷山と北上川

発刊にあたって

平成24年4月1日より『登米市まちづくり基本条例』が施行されましたが、まちづくりは地域の歴史及び伝統文化を継承しながら、地域づくりを進めることにありますが、地域の歴史・文化を知らない人も多いことから、多くの人に地域の歴史及び伝統文化を知ってもらい、今後のまちづくりへ繋げることを目的に**『浅水地域の文化財を地域の人に伝え、これからの地域づくりへ繋げる』**事業を行いました。

きっかけは「中田町教育委員会が建設した標柱」の文字が消えかかっている、消えて見えないものがある、よく標柱を見ると、長く浅水に住んでいても良く理解していなかったり　また、標柱の文書データも教育委員会に残っていなかったりと多くの課題があることが判明しました。

この<u>文化財を後世に伝え続けて行く</u>こともあり、**『浅水の文化財』**冊子を製作し全戸配布することにしました。

今回、登米市協働のまちづくり地域交付金事業の資金をもとに次の事業を行いました。

・『浅水の文化財』標柱の補修と建設　（補修　×4基
浅水文化財保存会認定×2基）

・『浅水の文化財』冊子の製作・全戸配布

・浅水コミュニティまつりで『浅水の文化財パネル展』を開催

これらを行うことで、浅水のまちづくり・地域づくりへ繋げて行きます。

なお、冊子の文章は皆さんにわかりやすく伝えることを目的に標柱の文等を参考にしており、詳細は中田町史等に記載されております。

浅水の文化財　一覧　1/2

No	名称等	区分	種類	国指定文化財	県指定文化財	市指定文化財	中田町教育委員会標柱	中田町史(改訂版)	
1	日高見流浅部法印神楽	民俗文化財	民俗芸能		○	○	○	○	P852
2	十一面観世音菩薩立像(本尊)	有形文化財	彫刻			○	○	○	
3	十一面観世音菩薩立像(旧本尊)	有形文化財	彫刻			○	○	○	
4	小島焼	有形文化財	工芸品			○		○	P733
5	小島田植踊	民俗文化財	民俗芸能			○	○	○	P855
6	小島願人踊	民俗文化財	民俗芸能			○		○	P857
7	浅部七福神舞	民俗文化財	民俗芸能			○		○	P858
8	長谷山甚句	民俗文化財	民俗芸能			○		○	P860
9	長谷山内囃子	民俗文化財	民俗芸能			○		○	P859
10	長谷観世音虎舞	民俗文化財	民俗芸能			○		○	P859
11	巻おいとこ踊	民俗文化財	民俗芸能			○		○	P861
12	桜「遮那桜」	記念物	天然記念物			○	○	○	P890
13	足尾神社の「榧」	記念物	天然記念物			○	○	○	
14	お鶴明神		名所				○	○	P885
15	浅部貝塚		貝塚				◎	○	P733
16	茶臼館跡		城跡				○	○	P746
17	高橋館跡		城跡				○	○	P731/P746
18	明神館(長谷館)跡		城跡				○	○	P744
19	大関、男山弥三郎誕生の地		名所				○	○	P886～887
20	白髭大明神		史跡				○	○	P729
21	大聖不動明王座像		彫刻				○	○	
22	月輪館跡		城跡				◎	○	P745
		月輪館跡入口					○	○	P730～731
23	遮那山　長谷寺		神社仏閣				○	○	P699
		長谷寺　入口					○	○	P702/P728
24	白山神社		神社仏閣				○	○	P682/P728
25	雲南神社		神社仏閣				◎	○	P683/P730
26	白山姫神社		神社仏閣				◎	○	P684/P731
27	足尾神社		神社仏閣				○	○	P685/P732
28	小島館跡		史跡				○	○	P745
29	長谷観音寺跡		史跡				○	○	P704
30	水越蔵場跡		史跡				○	なかだ訪ねある記 155	

○-中田町教育委員会で標柱建設
◎-中田町教育委員会で建設標柱を浅水コミュニティ運営協議会で標柱建替

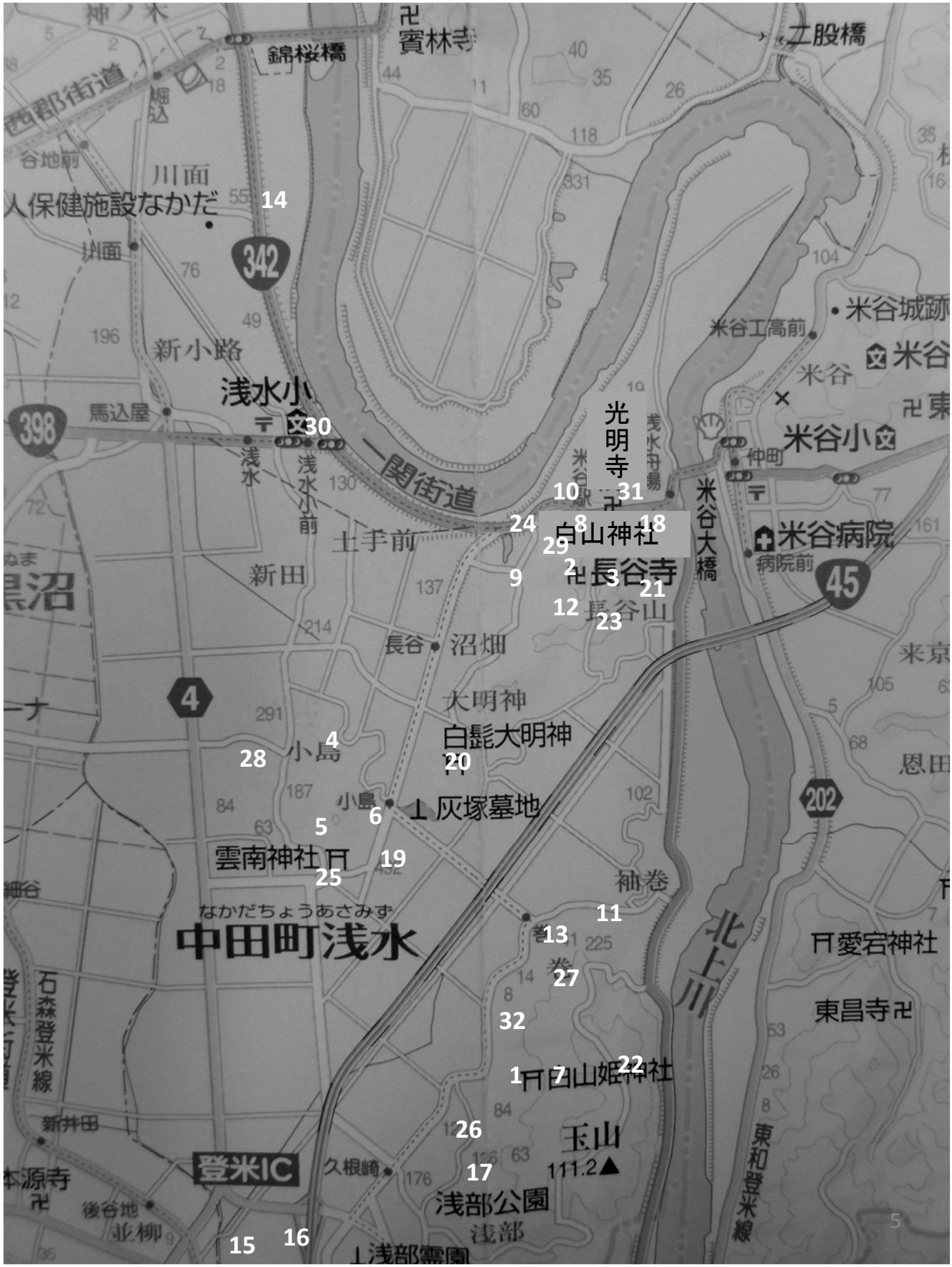
浅水の文化財　一覧　2/2

浅水文化財保存会で文化財に認定

No	名称等	区分	種類	国指定文化財	県指定文化財	市指定文化財	中田町教育委員会標柱	中田町史(改訂版)	なかだ訪ねある記	
31	光明寺	長谷	神社仏閣				●	○	○	P703/P730
32	折居大権現	巻	史跡				●	○	○	P730～731/P886
33	玉山不動尊	巻							○	148
34	七面観世音	巻							○	140
35	白鳥大明神と白石家	新小路							○	142
36	浅部久根崎の石碑	浅部							○	128
37	出雲神社	小島							○	130
38	若木山碑群と塔婆碑群	新田							○	133/136
39	首なし七地蔵	浅部							○	137
40	三宝荒神	新小路							○	139
41	笏納の峯(長谷山)	長谷							○	141
42	嶺鍛冶屋と三宝大荒神	長谷							○	156
43	岩淵翁頌徳碑	沼畑・新小路						○		1012
44	子安地蔵尊と子育観世音	舟場							○	138

●-浅水文化財保存会で認定・浅水コミュニティ運営協議会で標柱建設

浅水の文化財　MAP


錦桜橋
二股橋
西郡街道
川面
人保健施設なかだ
342
新小路
浅水小
398
馬込屋
浅水
浅水小前
一関街道
土手前
新田
長谷
沼畑
大明神
白髭大明神
小島
灰塚墓地
雲南神社
なかだちょうあさみず
中田町浅水
石森登米線
新井田
本源寺
後谷地
並柳
登米IC
久根崎
浅部公園
浅部
浅部霊園
玉山
111.2
白山姫神社
袖巻
北上川
東和登米線
東昌寺
愛宕神社
長谷寺
光明寺
白山神社
米谷工高前
米谷城跡
米谷
米谷小
仲町
米谷大橋
米谷病院
病院前
45
202
恩田
4
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

日高見流浅部法印神楽

番号-1　　浅部区

浅部法印神楽の伝書によると、室町時代の康暦年間（1379～1381）、瀧澤道胤が岩手県東磐井郡藤沢町西口にあった不動院に神楽を伝えたのが「西口流神楽」と称されるもので、寛保年間（1741～1744)に上沼八幡山へこの神楽が伝承されたとあります。 その後、延享3年（1746）、京都賀茂出身で東叡山の俊学が東北地方巡視の折、上沼妙覺院（白旗家）に滞在したとき、良真・自海両法印が随身して笛・太鼓の唱歌を学び、元付12番の神楽を伝授されたのが「加茂流神楽」と言われています。 江戸時代中期には、妙覺院を中心とした6ヵ院（旧上沼村妙覺院・旧桜場村八幡寺・旧新井田村一乗院・旧黒沼村黒沼寺・旧水越村長谷寺・旧浅邊村三壽院)の修験集団により神楽が演じられ、後年、神楽組に加わる法印も増え、往時は13ヵ院を擁するに至り、明治初年まで盛んに行われてきました。
江戸時代中期から幕末まで演じられてきた法印神楽も、明治初年の神仏分離令により修験院が解体され、神楽の継承が難しくなったため、旧浅邊村の三壽院芳賀廣瀬法印は上沼から別れ、明治5年（1872)、白山姫神社の氏子10名に50番の神楽を伝授し「日高見流神楽」と称し、今日まで連綿と伝承しています。　　参考文献　登米市民俗芸能協会　資料

長谷観世音の御本尊

十一面観世音菩薩立像

中田町指定文化財

番号-2　　長谷区

この長谷観世音御本堂は文化10年(1813)、水越村肝入り良作が願主となって再建された。 御本尊の十一面観世音菩薩立像は寛永10年(1633)登米伊達家の家臣高橋五郎兵衛重昭が主家の繫栄と武運長久を祈願して奉納したものである。 像高は7尺2寸(2メートル18センチ) 。

京都の仏師、八幡行念の作である。　(昭和51年4月1日指定)

参考文献　中田町教育委員会　標柱

長谷観世音の旧御本尊

十一面観世音菩薩立像

中田町指定文化財

番号-3　　長谷区

『長谷観世音の旧本尊』中田町指定文化財(平成17年1月26日指定)

今の御本尊が奉納される以前の御本尊で、長谷寺道場に安置されている。

像高は3尺6寸(1㍍9㌢)　平安時代後期、釋恵心僧部の作と伝えられている。

参考文献　　中田町教育委員会　標柱

小島焼

番号-4　　小島区

小島焼は、浅水小島392、鮏名家屋敷内に窯があった。昭和22年牛舎建築の際整地されて窯跡は見られない。 17世紀後半から作陶が始められ、明治10年頃まで続いたと見られる。町教育委員会所蔵の陶器は町指定の有形文化財となっている。　　参考文献　　中田町史

北上川が大きく蛇行する流域、中田町浅水地区に小島と灰塚という集落があります。 それぞれ江戸時代には浅部村、水越村に属し、登米伊達家の支配するところでした。 それぞれの土地で採取される粘土が陶器をつくるのに適したものだったようで、小島でつくられた陶器を「小島焼」、灰塚でつくられた陶器を「大明神焼」と呼んでいました。 どちらの窯も日頃使うものを中心につくっていましたが、「小島焼」では九曜紋などを付けた瓦のようなものもあり、注文をうけてつくっていた可能性もあります。

長谷寺の灯火具（高さ50Cm）　参考文献　中田町教育員会

小島田植踊

番号-5　　小島区

遠く平安の昔、奥州平泉藤原氏全盛時代、米作り奨励のため振り付けされたのが田植踊と言い伝えられています。 江戸時代に入り、仙台藩伊達家御糧米として小島耕土の米とともに、田植踊も登米の殿様から賞賛され保護を受けたとも言われています。 田植踊は、元々正月の予祝芸能として演じられてきたもので、正月様を迎え、寿命の長久を祈り、五穀豊穣を願う「田遊び」が風流化したもので、小正月には家々を廻り、小島地区の氏神様である「雲南神社」の祭典に奉納されてきました。 昭和52年（1977）11月、東京で開催された全国青年大会郷土芸能の部に宮城県代表で出場し、見事に日本一を獲得し、翌年4月には米国ディズニーランド公演を果たすなど国際文化交流にも貢献しています。 伝承曲目には、「袖振」「一本扇」「ニ本扇」の3曲あり、踊りと踊りの間に判人と呼ばれる者が口上を述べます。　　参考文献　登米市民俗芸能協会　資料

小島願人踊

番号-6　　小島区

江戸時代の中頃、願人坊と呼ばれる半僧半俗の遊行僧たちが、伊勢神宮参詣の代参などをしながら諸国を廻り歩いたとき、伊勢音頭や住吉踊を主体とした唄や踊りを演じていたのが願人踊と言われています。 江戸時代末期に、小島に滞在した願人坊たちから習い覚えた芸能の1つにこの願人踊があります。　願人踊は、元々五穀豊穣を祈願して演じられたものが、次第に信仰から離れ、座敷芸へと変遷し、酒宴の座興として「甚句」や「おいとこ」などとともに踊り継がれてきました。 昭和57年（1982）11月、東京で開催された全国青年大会郷土芸能の部に出場し、「小島田植踊」に続いて2度目の日本一に輝き、翌年3月には米国ディズニーランド公演を果たしました。 伝承曲には次のものがあります。　「願人はじまり」「目出度な」「奴さん」「姉さん」「お客さん」「伊勢はな」「ちょぼくれ」「道者願人」　　参考文献　登米市民俗芸能協会　資料

浅部七福神舞

番号-7　　浅部区

浅水浅部には、日高見流浅部法印神楽や浅部囃子舞とともに、古くから新年や祝言などに各地から招かれ演じてきた祝福芸として、七福神舞が古風なまま伝承されています。 全国各地で演じられている七福神舞の形から見て、一段と古いものであることが、次の点から明らかです。一般に七福神として伝えられている「弁財天」や「福禄寿」がなく、代わりに「翁」と「猩猩」が七福の神々として構成されており、その詞章や舞などに古雅な味わいを残しています。

舞の種類は、次のとおりです。　「翁舞」「大黒舞」「布袋舞」「猩猩舞」「 恵比寿舞」「寿老人舞」「毘沙門天舞」

参考文献　登米市民俗芸能協会　資料

長谷山甚句

番号-8　　長谷区

弘化2年（1845）、旧水越村長谷山に鎮座する白山神社の境内に祀られてある初瀬稲荷大明神が、正一位に昇格したのと、上沼八幡山から白山神社までの堤防改修工事竣工と併せてその落成を祝うため、関西芝居の中村茂十、一座を招き、3日3晩の大祭典を計画いたしましたが、あいにく7日間も雨が降り続きました。 このとき、芝居小屋に遊びに行った長谷山の若者たちが一座の役者から教えてもらった芝居の踊りと、元禄2年（1689）頃から伝え継がれた地踊りが一緒になり、現在の「甚句踊り」の振りになったと言い伝えられています。 この踊りは、他の甚句踊りとは異なり、明るく賑やかな中に、どことなく素朴さのある踊りへと変遷しており、お祝いの席には「さんさ時雨」や「おいとこ」などと、ともに踊り唄われています。

参考文献　登米市民俗芸能協会　資料

長谷山打囃子

番号-9　　長谷区

長谷観世音の神輿が、毎年旧暦2月の初午に際し、旧水越村を廻って火伏せの祈禱をしていた記録が、弘化年間（1844～1848）の古文書に見受けられます。　この神輿に供奉して、7つの集落を7日間にわたり各戸毎に舞ったという虎舞のお囃子が主体となっているのが「長谷山打囃子」です。「長谷山打囃子」の復活は虎舞と囃子の伝承者、新田の小野寺忠左エ門氏の指導により、実現されました。 昭和49年（1974）からは、子どもたちも演じるようになり、現在では、幼稚園児からお年寄りまで、地域ぐるみで民俗芸能伝承活動にあたっています。 伝承曲目には、次の5曲あります。「豊年ばやし」「甚句ばやし」「虎舞ばやし」「軒ばやし(やぐるま）」「しころばやし」　　参考文献　登米市民俗芸能協会　資料

長谷観世音虎舞

番号-10　　長谷区

天正18年(1590)、長谷観世音別当の19世大元坊隆源法印智満の代に、48坊の一部に異教(キリシタン)が流行し、このため伊達勢の打ち手20数騎の奇襲をうけ、焼き打ちをかけられ一山は火難をうけました。 このとき、いずこからともなく親子の大虎が現れて、観世音堂の後ろの池に飛び込み、全身の毛に水を含ませながら、数度にわたり火中に飛び込み、猛火を鎮めたと言い伝えられています。 長谷観世音虎舞は、観音様の化身として出現した、この大虎親子の勇猛な姿を時の信者たちが後世に残すために舞い始めたものといわれています。　毎年の初午(はつうま)には、旧水越村の集落毎に7ヶ所のお仮屋を設け、牛頭天王を祀る神輿とともに虎舞を迎え、火難防除・悪魔退散・家内安全・五穀豊穣を祈ったもので、昔は初午の日を初日として7日間にわたり舞い廻ったそうです。

現在は初午の日だけ浅水地区内を舞い廻っています。

参考文献　登米市民俗芸能協会　資料

巻おいとこ踊

番号-11　　巻区

天保年間（1830～1844)、幕府の老中水野忠邦の手によって企図された印旗沼（現千葉県）干拓工事の折、そこに働いていた土工たちによって唄われた「おいとこそうだ」が、江戸にまで伝わったものが「おいとこ節」となり、その後、流行り唄として全国各地に普及したと言い伝えられています。　巻おいとこ踊は、江戸時代末期、浅水長谷山に伝えられた踊りの一つであり、明治10年（1877)頃、長谷山から巻に婿養子に入った佐々木吉兵衛が伝え、その後、大正年間(1912～1926)、長谷山から千葉寛蔵を師匠に招き「おいとこ踊り」や「願人踊」「甚句踊」などを習い覚え、お祝いの宴席などに演じてきました。　戦前まで盛んに演じられてきたこの踊りも、社会情勢の変化に伴い忘れ去られたため、平成2年（1990）有志が集まり、「おいとこ踊」の復活を目指し婦人部が中心となり稽古を積み、平成4年（1992）には保存会も設立され、浅水コミュニティまつりや町内各種大会に出演し、現在に至っています。　　参考文献　登米市民俗芸能協会　資料

遮那桜

番号-12　　長谷区

平泉に下った源義経が、文治3年（1187）に長谷寺を訪ね、童名遮那王丸から遮那山と称し、その時の源義経お手植の桜と言い伝えられている。

中田町指定天然記念物(昭和61年10月31日指定)

参考文献　中田町教育委員会　標柱

足尾神社の大榧

番号-13　　巻区

推定樹齢400年の大樹。 樹高22．3メートル、主幹胸高4．34メートル。 枝打ちした痕もなく自然形を保ち樹陰は榧の木らしい暗さがあり神の宿る感がある。　以前はこれよりひと回り大きな榧があったが昭和16年火災の為、焼失し現在の榧だけが残った。 未だ枝先に若々しさが感じられ、大変貴重な地域の宝なので是非保護して後世に残したい。

参考文献　中田町教育委員会　標柱

お鶴明神

番号-14　　川面区

慶長11年(1606)仙台藩では治水策として北上川の流路変更を計画、初代登米領主・伊達相模宗直は、上沼大泉から浅水に至る「6．65km」を築堤し、豊沃な登米耕土の基礎を確立した。 しかし、その後も堤防が決壊し、水害を蒙った。 続いて2代伊達若狭宗勝も決壊の禍を断つため、更に3年の歳月を費やして修復し、民生を安んじた。　世にこの堤防は、相模土手・若狭土手とも言われる。　また、伝承ではあるが、堤防を築くに当たり生き土手にすれば、どんな激流にも押し切られないとの迷信から、たまたま弁当を運んできた「お鶴」を人柱にした。 以後、この堤防は決壊を免れたという。 付近には、2坪余りの「お鶴の涙の池」があったが、明治の初めに埋没した。　現在の池は平成10年3月に復元したものである。お鶴の素性は不明だが、岩手県南部の出身で、村の彦総長者の家で働いていた娘であったと伝えられる。村人達はこれを哀れみ、小祠を建て「お鶴明神」として、その冥福を祈ったと言う。　現在でも旧暦の3月15日にはお鶴明神講の方々が、のぼりを立てご神体を奉り、冥福を祈っている。

参考文献　中田町教育委員会　標柱

浅部貝塚

番号-15　　浅部区

昭和40年12月、開田工事中に石器や土器などが発見され、昭和41年6月2日から10日までの9日間発掘調査が行われた。 調査は、東北大学考古学教室が指導し、上沼農業高校生徒の協力を得て実施された。 出土遺物は、勝坂式土器(火焔土器)骨角器、石器、土器片など多数。
発掘された土器は縄文早期から後期のものと推定される。

参考文献　中田町教育委員会　標柱

茶臼館跡

番号-16　　浅部区

月の輪舘の出先機関で茶臼坊主が専ら近隣にある館への連絡や情報交換にあたったところではないかといわれ、附近から発掘調査の結果多数の縄文土器が出土した。

参考文献　中田町教育委員会　標柱

高橋館跡

番号-17　　浅部区

仙台領古城書上に「東西40間、南北25間、城主　二階堂平内」とある。異本に「高梯城二階堂平助」と補している。　城主高橋氏は平泉藤原氏と関係があり、葛西氏家臣の二階堂氏に滅ぼされたものと思われる。現在「要害」の地名が残る一帯が館跡と考えられる。

館の西側にも壕の痕跡が認められる。

参考文献　中田町教育委員会　標柱

明神館(長谷館)跡

番号-18　　長谷区

この地に「明神館」があったので、この一帯を館山という。仙台領古城書上には「明神城は山館で東西36間、南北36間で瀬川左近の館したところ」とある。 明神館の名称は館主瀬川氏が氏神として信仰した紫大明神(紫神社)が祀られていることによる。 水越長谷山に所在したので「水越館」「長谷館」ともいう。館主については瀬川右近などの説もある。

参考文献　中田町教育委員会　標柱

大関、男山弥三郎誕生の地

番号-19　　小島区

浅水字小島の東端に大崎と呼ばれるところがあり、大関・男山弥三郎の墓がある。 父、茂左衛門の長男に生まれ、力量・体格ともに秀れ、13才にして5斗入俵(75キログラム)を軽々と担ぎ隣人に怪童と呼ばれた。 父の奨めで江戸に出て相撲取りになることを決意、8泊9日を経て江戸に着く。以後5年の歳月が流れ年改まって、文化元年甲子(1804) 12月20日小田原八幡の社前で恵比寿講相撲が催され、殿様方の抱え力士の優勝競いで、優勝者は100石(米4斗(60Kg)入250俵、15，000キログラム)をもって召抱えられる大勝負であった。 弥三郎も一番出世を目指して出場し、西の大関相模灘との取組みで見事優勝した。 然し、これが禍いとなり相模灘の恨みを買い毒殺されたが後に米山町出身力士、丸山権太左衛門の弟子が遺骨や髷、軍配等を届けられこの地に葬られたと言い伝えられている。

参考文献　中田町教育委員会　標柱

白髭大明神

番号-20　　沼畑区

大同2年（807）、奥州7ヶ所に観音を勧請し、その1つが長谷寺の十一面観世音菩薩である。 尊像は仏師妙観聖人によって彫刻された御丈8尺5寸、尊像彫刻に当たり、最証法師が良木を尋ね、白髭の老翁の案内で桂の良木を、この地で見出し、切株に5間4面の堂を建立し、白髭の老翁を祀り、天正18年（1590） 葛西家滅亡まで長谷観世音48坊の1坊として信仰を集め大明神という集落名の起因となったと言い伝えられている。

参考文献　中田町教育委員会　標柱

大聖不動明王座像

番号-21　　長谷区

「長谷寺道場の御本尊」中田町指定文化財(平成17年1月26日指定)
長谷寺が羽黒派修験道時代の修験道場の御本尊で、像高は3尺7分(93㌢)である。 鎌倉時代の仏師光慶の作と伝えられ、天明3年(1783)水越村及川清太郎常寿が京都から運ばせて奉納した。

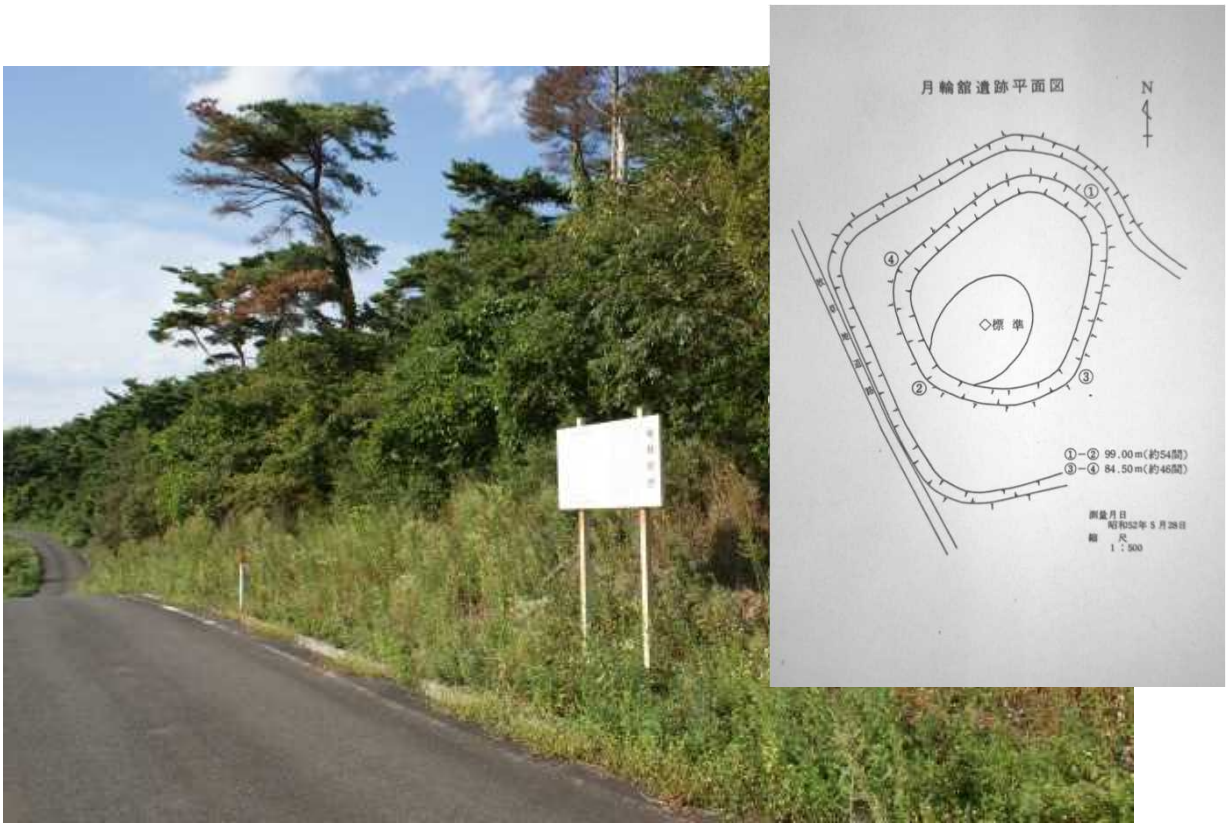
参考文献　中田町教育委員会　標柱

月輪館跡

番号-22　　巻区・浅部区

月輪館跡は、標高約111メートルの水越玉山鳥討嶺にあり、その規模は東西30間、南北60間ある。 往時の面影を留めるものは館を囲む壕だけで、内濠外壕は今も歴然と残っている。 東は断崖絶壁、眼下に北上川を望み、難攻不落、天然の要塞といえる。 言い伝えによれば、月輪六郎・七郎(一説に五郎・六郎)兄弟の居城で迫合戦の折、月輪兄弟討死の悲報を聞き、妹おりい姫は、お付き女中と共に月輪館を脱出し、山中で自害して果てた。「折居権現」は、その女中が、姫の亡骸を手厚く葬った地と伝えられている。

参考文献　中田町教育委員会　標柱



遮那山　長谷寺(しゃなさんちょうこくじ)

番号-23　　長谷区

天台寺門宗、本尊十一面観世音菩薩、開基坂上田村麻呂、天平宝字6年(762)藤原恵美朝臣朝獦(ふじわらのえみのあそんあさかり)　が山頂に笏を納めこの地の発展を誓願、神護景雲2年(768)釋勝道上人(しゃくしょうどうしょうにん)が山頂に遮那山法誓寺を開いた。延歴20年(801)坂上田村麻呂、蝦夷征伐により帰京後最証法師に命じて十一面観世音菩薩を刻み安置し長谷寺と改める。

本尊　十一面観世音菩薩は昭和54年に中田町指定文化財となる。

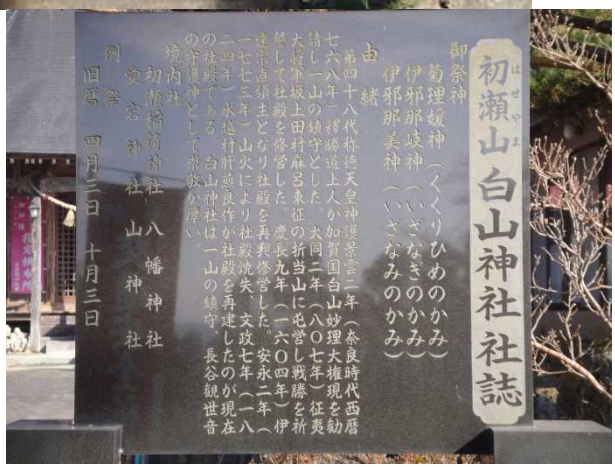
参考文献　中田町教育委員会　標柱

白山神社

番号-24　　長谷区

白山神社は奈良時代の神護景雲2年(768)釋勝道上人が加賀の白山妙理大権現を勧請した。 大同2年(807)坂上田村麻呂が屯営し、戦勝を祈願した。 領主伊達宗直が尊崇し慶長9年(1604)社殿を修営した。
ご祭神は菊理媛神(くくりひめのかみ)・伊邪那岐神(いざなぎのかみ)・伊邪那美神(いざなみのかみ)で一山の鎮守として崇敬が厚く、伝統芸能「長谷山甚句」発祥の地であるとも伝えられている。

参考文献　中田町教育委員会　標柱



雲南神社

番号-25　　小島区

本社は延文2年(1357)の勧請による、 京都元官幣大社上賀茂神社より分霊の加茂別雷皇神を祭祀している。 江戸末期には、運難権現別当光輪山常寛院として神仏混合社となったが、明治元年、神仏分離により雲南神社となり、明治8年から昭和20年までの間、村社に列せられた。 現在の社殿は、元禄2年(1689)伊達基永の再興によるもので境内の池に架かる「万年石橋」は、明治13年正月に門付で舞った田植踊（神社例祭奉納舞）の舞子達へのご祝儀で造られたものである。 石橋には、その時の踊り手の名が刻まれている。

参考文献　中田町教育委員会　標柱

白山姫神社

番号-26　　浅部区

浅部玉山の西南復に鎮座する。 白山姫神社は言い伝えによれば延歴5年(786)坂上田村麻呂将軍が蝦夷征伐の際の陣跡地で、文治5年(1189)源義経が奥州下向のとき白山権現を勧請したもので、ご祭神は菊理媛命・伊弉諾命(くくりひめのみこと・いざなぎのみこと)である。当神社に古くから伝承されている日高見流浅部法印神楽は、昭和61年11月28日宮城県指定の無形民俗文化財となっている。

参考文献　中田町教育委員会　標柱

足尾神社

番号-27　　巻区

ご祭神、国常立命(くにとこたちのみこと)、例祭、4月８日、8月８日、今から約350年前、伊勢詣りの帰り、利蔵法師によって「常陸国の足尾神社」より神のお告げによって3寸大の御神体を奥州に勧請し、白石宅に安置されたと伝えられている。 昔から「足の神様」として信仰があり、例祭には近郷、栗原、本吉、気仙沼、古川方面より大勢の参詣者があった。 なお、当時氏子の寄進に係る大草鞋も倶に祀られている。 明治42年に白山神社に合祀されたが、その後、当社に返し、祭礼を挙行して厚く崇敬されている。

参考文献　中田町教育委員会　標柱

小島館跡

番号-28　　小島区

別名、水越館ともいう。 一書に水越播磨の居城と記録されているが、その人物の年代、素性などについては不詳である。 小島館は、平山城の型式をもっており、現在山内貞幸氏宅の西隣の丘にあり、南北に50㍍ほどの細長い本丸跡が残っている。 東西にも相当の長さがあったが、両面から削られ、わずかしか残っていない。 本丸跡の片隅には三宝荒神社が祀られており、本丸を中心に3段ほどの広い土壇がとり巻いている。
下段は深い杉林となり、その下には古い墓石が散在している。
なお、以前は土塁が完全な形で残っていたが、今はその形骸がわずかに北面に見られる。　　参考文献　中田町教育委員会　標柱

三宝荒神社

長谷観音寺跡

番号-29　　長谷区

この平坦地は、観音寺の廃寺跡である。 観音寺は、真諒覚乗寺（登米町・明治3年廃寺）の末寺で寛文2年(1662)寒宥法印の開山とされ。廃寺の年代等は、不詳。　　桜の古木は「観音寺の桜」と呼ばれ、往時が偲ばれる。

参考文献　中田町教育委員会　標柱

水越蔵場跡と登米耕土開拓

番号-30　　新小路区

藩政時代（約300年前）に、此処　浅水小学校校に水越蔵場があった。蔵場は、雑穀蔵2棟で1棟は15間（27㍍）に2間半（4.5㍍）、1棟は16間（28.8㍍）に2間半（4.5㍍）、蔵には米5，000石（750㌧）余り、大豆1，500石（225㌧）余りが納められた。収納する村は水越村、浅部村、桜場村など、11村を数える。 本郡の蔵場は5ヶ所（佐沼、西郷下、水越、桜丘、赤生津）で 5，000石を収納が出来たのは、佐沼と水越だけであった。　登米館初代の白石相模宗直の先祖が治水工事の経験を持っていたことから、白石相模宗直は大泉から浅水までの堤防（相模土手）を築いたり、河川改修（曲袋など）により、荒地の開墾（新田開発・浅水から登米・森等）を行い、開発により耕土は美田となり、米の生産が著しく増加した。　これにより、我々の先祖は余った米を仙台藩に買ってもらい、この藩米を水越蔵場の堤防下の新川岸（しんかし）から平田舟で北上川を下り、石巻まで運ばれ、石巻からは千石船に積み替えられ、貞山掘を利用して仙台、岩沼、さらに阿武隈川さかのぼり、海に出て、江戸に届けられた。 この様にして、江戸の3分の2の米は仙台藩からの登り（のぼり）米、即ち『登米（とめ）』というブランド米に、江戸ではなっていた。

参考文献　中田教育委員会　標柱　等

照谷山光明寺（しょうこくざん　こうみょうじ）
番号-31　　長谷区

光明寺の法系は峨山禅師の門下、25哲の1人、大源宗真である。愛知県性海寺開山、周鼎中易よりその法を中田の地に流布、登米町龍源寺に至る。 同寺5世　明厳闇哲（慶長14年(1609)8月24日遷化）開山、現在に至る。

照谷山光明禅寺御開山法系

開山　天正12年6月（1584）

本寺　登米町龍源寺

本尊　釈迦牟尼仏

参考文献　菩提樹　登米郡曹洞宗の寺でら

折居大権現

番号-32　　巻区

天文年間(1532～1554)月輪六郎、七郎（一説には五郎、六郎とも言われてる）と称する兄弟、迫合戦の折、自害しようとした迫城主(藤原師門）を諌めて落ち伸びさせ、六郎が城主の身代わりとなり、七郎と共に奮戦したが、遂に討死。　その時水越玉山の月輪館にいた妹おりい姫(18才)は、兄弟討死の悲報を聞き、お付女中と館を脱出し麓近くまで下山したが、前途を悲しみ自害し果てた。 お付女中は姫を手厚く葬っていずこかに立ち去ったという。 以降、この地に祀られている。 現在も、毎年旧10月19日に例祭を行っている。　　参考文献　中田町史

玉山不動尊

番号-33　　巻区

水越玉山の北端より国道342号線の険しい崖の中腹に、大きな岩を背負って北上川を望むように2基の石宮が立っています。 山神と不動明王が刻まれています。 昔、川向より幾夜となく光りものが玉山に落ちた。 奇異に思った村人が山に入って見ると剣型をした石が岩に突っ立っていた。折しも地域に疫病が蔓延して死人が出て困り果てて居たが不動尊を祀るとピタリと疫病が止まった。　集落全戸により、現在も、4月28日と9月28日にお札を起こし献膳を行いお参りを行っている。

参考文献　なかだ訪ねあるき

七面観世音

番号-34　　巻区

水越玉山の北斜面の七面観音の由来は2通りの説があります。

1.「月輪舘（月輪六郎・七郎の居城）」の明神であるという言い伝えで、
　佐々木家が毎年9月17日に祭祀を行っている。

2.長谷寺の先祖が祀ったもので、年代は不明だか、六部（法華の行者で諸国を回り、仏像を背負い家ごとに米銭を請い歩く巡礼者）が巻の地で悲運の死を遂げた。 その後、年を経て巻集落に災難病厄が続いたので、ご祈禱占いをしたところ、六部のたたりであるとのことで、長谷観世音　春日家の先祖　元海法印が慶応年間に小堂を建て七面観音を祀ったとあります。

参考文献　なかだ訪ねあるき

白鳥大明神と白石家

番号-35　　新小路区

浅水下川面の白石家に白鳥大明神が祀られています。 この明神は、代々白石家の守護神として祀られており、宝暦6年（1756）10月建立とあり、旧暦3月19日と9月19日に祭祀を行っています。

伊達藩主は登米館の白石家（白石家は天和2年（1682）伊達姓を賜り伊達一門に列せられた）が北上川治水工事（特に北上川堤防工事、若狭土手・相模土手の建設）や新田開発などを行いましたが、このとき土木の知識にたけているとして白石家の先祖が普請奉行の任にあたったとあります。

参考文献　中田町史　なかだ訪ねあるき

浅部久根崎の石碑

番号-36　　浅部区

　此処久根崎の石碑は現地に10基と隣地二階堂家宅地内に12基ある。庚申供養には、天明・天保の大飢饉での餓死者を祀っている。 何れも白山姫神社の宮司三寿院が先立って建立された。 また明治初期二階堂家の先祖が諸国を漫遊し戴いた経文を納めた埋経塚、昭和になって酪農礎、平成に畜魂碑、敬神祀も建ちその由来も記されている。 遠い昔の碑から新しい碑まで地域歴史の石碑群である。

参考文献　なかだ訪ねあるき

出雲神社

番号-37　　小島区

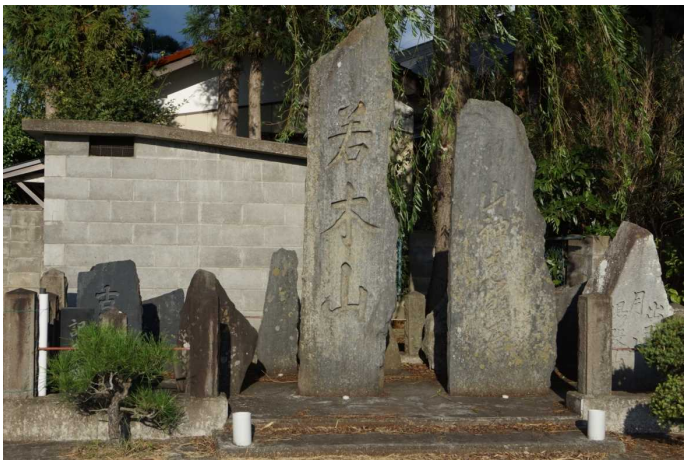
神社の板札に宝暦8年寅歳（1758）、木挽大工7名で建立するとあり、建主は布沢家の先祖です。 ご祭神は素盞嗚尊（すさのおのみこと）が安置されています。 御神像は厳めしい真赤な不動明王、祈願札には午頭天皇様とあり、集落では御天王様と呼んでいるので合祀されていると思われます。平成10年4月に布沢昌治さんにより大改築がなされました。

参考文献　なかだ訪ねあるき

若木山(おさなきさん)碑群と塔婆(とうば)碑群

番号-38　　新田区

新田集落には若木山碑群と塔婆碑群があります。 若木山碑群は道路拡張で平成14年に移したもので、もとは千葉徳商店の辻にありました。石碑は12基あり宝暦6年(1756)から大正9年までです。 石碑は出羽三山、古峯山など上新田地区の講との関係が深いものばかりです。 終戦直から昭和40年頃まで、若木山のお祭りが田切(千葉岩喜氏の屋号)の庭で行われ、この神様は流行病(はやりやまい)に御利益があるといわれておりました。 塔婆群は新田と小島境の十字路に松のある石碑群です。石碑は14基あり、寛文12年(1672)から昭和20年までで、若木山と同じ様に、出羽三山、古峯山など下新田地区の講との関係が深いものばかりです。　上、下新田地区とも、戦前は最上講などの代参講が盛んでしたが、近年は戸主の契約講、主婦の山神講などの講はそれぞれ寄り合いをもち、地域の安寧や家内安全、五穀豊穣などを願いながら相互交流をはかっております。 参考文献　なかだ訪ねあるき　等



首なし七地蔵

番号-39　　浅部区

通称（山居沢）に二階堂家の旧墓地があり、その入り口に首のなくなった7つの地蔵様が並んでいます。 そのお地蔵様は二階堂家の先祖が大肝煎（おおきもいり）を勤めた7代を供養したものです。 二階堂家の先祖は葛西家に仕え葛西家が滅亡後、浅部村に定住、三郎左衛門の代より、三郎右衛門、三郎兵衛、權九郎、孫左衛門、正吉、正蔵と次々と勤め元和元年（1615）から宝暦3年（1753）まで138年大肝煎（おおきもいり）を勤め、同一家の者が長期間勤めることは極めて珍しい。

「お地蔵様の首を持っていると勝負に必ず勝つ」と言う言い伝えから博徒に持ち去られ首なし地蔵になってしまいました。その後、川原から拾った玉石が首となっております。　　参考文献　なかだ訪ねあるき

三宝荒神

番号-40　　新小路区

浅水新小路に「お荒神さま（三宝荒神）」が祀られています。

火の神である三宝荒神は、鍛冶屋だった及川家の先祖が祀ったもので、昔はカラマツや杉の老木と400年以上前の板碑群に囲まれ、伝説の片葉の葦が生い茂る小丘（お荒神山）にありました。　そこは鳥喰という地名で、水越八景の1つに数えられていましたが、今では、耕地整理により付近一帯が田んぼとなった為、当時を忍ぶ影もありません。

尚、新小路地区の青年たちの奉仕活動により、毎年　盛大に「どんと祭」が行われ地域交流の場となっています。

参考文献　なかだ訪ねあるき

『笏納(しゃくのう)の峯(長谷山)』

番号-41　　長谷区

浅水 長谷山頂白山神社の地は、その昔、「初瀬山(はせさん)笏納の峯」と呼ばれていました。 約1，200年前天平宝字6年(762)多賀城の高官　按祭使(あぜち)藤原恵美朝臣朝獦　(ふじわらのえみのあそんあさかり)　が山頂に登り、この山に天徳が授かり隆昌するように誓願し、　笏(正装の時右手に持つ板片)を埋納して誓歌を詠みました。　　朝獦の誓願が叶って、笏納の峯に長谷観世音(長谷寺)と白山神社が鎮座し、鎮守の森となっています。　　参考文献　なかだ訪ねあるき

嶺鍛冶屋と三宝大荒神

番号-42　　舟場区

舟場区には、集落で信仰されている三宝大荒神があり、佐々木久氏宅に祀られています。『三宝大荒神』は聖なる火の神で、鍛冶屋の守り神と伝えられています。　地区内には嶺鍛冶屋という地名があり、昔腕利きの刀鍛冶が住んでいたそうです。又　佐々木家3軒が『名剣』の屋号があったりと、嶺鍛冶屋の地名と三宝大荒神も刀鍛冶に由来するものです。

参考文献　なかだ訪ねあるき

岩淵翁頌徳碑(しょうとくひ)

番号-43　　沼畑区

岩淵良太夫翁は宮城県実業界の先覚である。その力を公共共同事業に尽くした。 明治41年5月に、農商務大臣から賞を賜った。理由は、以前から心を産業の発達に注いで、私財を投じて米穀の改良を図ったり、農民を導き助けて、田畑を耕すことや肥培の改善に大いに骨を折って、地方の実業を震い起すことに寄与したことは顕著なものがあったからである。 また、製糸工場を建ててもっぱら製糸の改善を図って、その功績は誠に褒めあげるべきである。

大正元年(1912)に碑を建てて、後世にのこした。この碑には『徳を以て導きを施したことは、どうして1つの村里に止まるものであろうか…。』と記されている。 碑は浅水字長谷山309番地　三浦守氏の居地の前方にあります。

補足　浅水村に生まれる。慶応4年(1868))、資金1千両を藩に献上し、大藩士となる。 その後学区取締・村長・勧業会議員・蚕糸業顧問・産業組合顧問・農工銀行取締役等を歴任。特に製糸場を経営し、養蚕講習所を設けたりした。 このほか村内の大小溝渠を石橋とし、公益に貢献した。

参考文献　中田町史

子安地蔵尊と子育観世音

番号-44　　舟場区

浅水舟場区嶺鍛冶屋　鎌田房喜氏宅地内に、ひっそりと二体の石像の地蔵尊が祀ってあります。　子安地蔵は天明年間（1781～1789）建立で昔から、安産の守り神として大変信仰が厚かったと言われています。

子育観世音は寛政年間（1789～1801）建立で幼児の夜泣きに霊験があるとのことです。　二体の地蔵尊はもともとは現在のところにあったのではなく、嶺鍛冶屋の旧道の道の路傍にあったものを信心深い鎌田家初代当主の方が明治初年頃に現在の場所に祀ったとのことです。

参考文献　なかだ訪ねあるき

登米市中田町

浅水の文化財

製作責任者

浅水コミュニティ運営協議会
会長　大内　直人
副会長　高橋　敏允　・　伊藤　孝

後援　浅水文化財保存会
会長　佐々木　榮之丞
副会長　佐々木　正
浅水コミュニティ総務部(行政区区長)
総務部長　橘　紀夫

文章作成協力

元中田町文化財保護委員　春日　了剛　二階堂　良亮
元中田町史編さん委員　春日　了剛
浅水文化財保存会理事　小野寺　明男

企画・編集・写真

浅水ふれあいセンター（浅水コミュニティ運営協議会　事務局）
センター長　及川　豊二

発行　浅水コミュニティ運営協議会（浅水ふれあいセンター）
〒987-0611
宮城県登米市中田町浅水字荒神堂150-2
☎ 0220-34-2008

印刷　川内印刷株式会社
宮城県登米市登米町寺池桜小路89

発行日　平成24年11月16日

浅水長谷山と北上川